

古書店のお茶

中村青史

古書籍収集にかけても第一人者であった徳富蘇峰が、「骨董の説」(明40)という一文の中で、「掘出しの特質は、意外にあり」「人間の愉快は、意外より大なるはなし」と言っている。その蘇峰が「熊本には本を売らない古本屋がある」と言った、その古本屋に学生時代の一年半ばかりを下宿した。それは「意外」のことだったのかどうかは知らないが、とにかく現在なお古本屋さんとの付き合いは続いており、熊本のみでなく東京でも懇意な古本屋さんが数人いる。

古本屋と新本屋との大きな違いは、店頭でお茶が出るか出ないかにある。なじみの古本屋さんでは、大いにお茶の馳走にあずかる。買って買わなくてもである。店の主人とお客は人間関係が濃厚である。のどかな雰囲気がある。先の「本を売らない」というのは、一冊しかない貴重な本は、特定の個人の所有になってしまうと他の人が見れないということである。だが、そんなことが現代のせちからさから追放されるのかも知れない。昔風の古本屋が年々なくなっていくのは寂しい。

「売らない本」と言えば、東京は本郷にペリカン書房という古本屋がある。小さな間口の目立たない店で、よく表のガラス戸が閉まっている。このしゃれた名前は、一時レストランだったのをそのまま使用しているからである。早稲田大学の竹盛天雄先生がそこを紹介して下さったのは、もうかれこれ三十年昔になろうとしている。ペリカン書房の主人の名前は品川力という。本好きの者なら大い

ている。随筆集「古書巡礼」の中に「売らない本」もはいつている。内村鑑三の研究者でもあるが、彼はよく世話の届く人である。東大の明治新聞雑誌文庫の柳生四郎氏を紹介してくれたのも彼である。新刊本でも、地方出版のものや、小さな出版社のものは、一般の新本屋では入手しにくい。品川さんは、そんな本を持っていて分けてくれる。お茶をいただきながら、昨今の古書にまつわる話や、研究者の動向など、耳学問ができるのもまたありがたい。

まだ三省堂の漢和辞典編著作者長沢規矩也先生がお元気の頃だから、これは随分と古い話だが、和服姿の先生の鞆持ちならぬ風呂敷包み持ちで、神田の古本屋巡りをしていたころを思い出す。お茶をいただいたのもその頃がはじめてであったのだろう。そして、「君これ買つときなさい」と言われる。先生にとっては、安い掘り出しものなのだろうが、学生の私にとっては大金であった。が、無理算段して求めたものが、今でも手元に何冊かある。その中で古い国会図書館の目録三冊がある。最近の本の索引には役立たないが、明治・大正期の本を探すときは重宝だった。国会図書館の図書請求票を、ごっそり持ち帰っていて、それに書き込んで行くので目録箱の前での時間が節約できた。近ごろは請求様式が変わってその便利さは失われたが、古びた図書目録は、恩師と古本屋の主人の顔を思い出させて、本棚の隅に埃りをかぶって立っている。

(教育学部教授 国文学)